



# ぶなの森通信

No.4

2018年7月

## お子さんと一緒に歌ってみませんか？ 「は・な・う・た」

皆さんは、鼻歌を歌っていますか？ 童謡でも、ポップスでも、はたまたクラシックの曲でも、何でもいいのです。鼻歌って、機嫌のいい時に出来ますよね。お子さんと歌う時、張り切らないであの「鼻歌」感覚で歌うと、音量や強さなどちょうどよい加減です。

「歌う」というと、構えてしまう人が多いです。「わたし音痴だから音が正確に取れないの」とおっしゃる方もいますね。でも、鼻歌だったら歌えるかもしれません。かるーく、小さい声で、がコツです。

鼻歌で何が大事か、というと、「楽しい」がポイントです。鼻歌が出る時は、機嫌がいい時、お気に入りの物が手に入って嬉しい時、会いたかった人に会う前ウキウキしている時。皆さんはどんな時に鼻歌を歌いますか？

私は、あの軽さがとても好きです。頑張過ぎてない軽さ。

「子育て」というと、「あー大変！」と想像しますか？「楽しいよねー」と言えますか？

どちらもあるでしょうね。ただ、今まで多くのお母さんを見ると、みなさん本当に、頑張っていていらっしゃいます。

お子さんが、泣いたら、「私の何がいけなかったのかしら？」「私はあの子のために何をすればいいのかしら？」

習い事は？ スポーツはどうしましょう、芸術的なこともさせたい、文字も覚えさせたい、学校へ行って困らないように数も早く覚えさせたい。なぜそうさせたいのでしょうか？多くの方の答えは「子どもが大人になって困らないため」です。

小学校へ行って、みんなと同じように授業を受けて、試験もそこそこで、中学にいてスポーツや音楽に打ち込み、高校では勉強とスポーツを両立して、できたら国立大学へ行ってほしい。就職浪人なんかはせず、そのまま良い会社に就職してほしい。親の願いにキリがありません。そして、それは知らず知らずのうちに子どもへのプレッシャーとなっていきます。言葉には出さなくても、態度で示さなくても、子どもはお母さんの身体全体から発している、強いレーザービームにすっかりやられてしまいます。そしてその結果は……チック症が起こったり、病気になったり、大きくなれば鬱になったり、結果登校拒否、引きこもりになったり。

どの子にもその子なりの素晴らしい力があります。遺伝で受けつがれたものでなく、持って生まれたその子だけのもの。子どもといえども、大人の皆さんに負けにくいぐらいの素晴らしい才能があります。

「ぶなの森」では月に2回ほど「にじみ絵」の時間があります。紙の両面を水で濡らして、水彩絵の具を付けた筆を動かして画用紙に色を置いていきます。説明すると簡単ですね。ただの絵の具遊び。そうなんです、これは画用紙の上の「色あそび」なのです。人生初めての「色の体験」です。もっと言えば「色が語るものに耳を澄ます」カッコいいでしょ！色は何を語ってるのでしょうか？色の変化、にじみぐあい。もちろん2、3歳の子どもたちはそんなことは全く頭で考えていませんが、ただただ色を画用紙に落としていきます。私たち大人もやってみるのですが、みんな声をそろえて「むずかし〜」と言います。テーマ無し、自由、となると何を書いていいかわからないそうです。無心に目的なく描くことができないのです。何か「目標、目的やテーマ」がないと書けない大人と違って、子どもたちは、それはそれは楽しそうなんです。それに比べて、うちのスタッフは(私も含めて)……みんな困った顔をします。何回しても、何かを描こうとしてしまいます。



# ぶなの森通信

No.4

2018年7月

子どもたちは目標やテーマを持ちません、ただひたすら「今」と言う時間を楽しんでいます。出来上がった作品は？それはそれは、美しい、の一言です。大人が言う「上手」という領域ではありません。

大人の絵は？ 当然ながら、何かを描こうとして描けなかった中途半端な絵。 いえ、これは言い過ぎかな？

芸術とはこういうものなのでしょう。 プロの絵かきは、まるで子どもの様に純粋に色に向かうのでしょうか。

今の絵かきさんは「売れる絵」を描く、と聞いたことはありますが。

たぶん、ゴッホやピカソやそういう世界の有名な画家は、こうやって、どこかから降りてくる何かを、色や形として、キャンパスの上に表現していくものなのでしょうね。 そういう意味では、「ぶな」の子どもたちは、小さな画家と言えます。

子どもたちは「今」を生きています。「今」を楽しんでいます。

勉強も、芸術もそれでよいのではないのでしょうか？ 今の楽しい気持ち、続いて線になっていけば、その先にはきっとなにかキラキラしたその子だけにしかないものが、心の中に育っていくと私は信じています。

目的やテーマがないとできない、やる気が出ないのは大人です。私がずっと続けている「直感教育」のワークショップに行くと、ドイツの人たちは、必ず聞きます。「これは何のためにするのですか？」「これはなぜ子どもたちにとって良いのですか？」良い理由がないとできないのか？ 効果があると分かるからやるのか？ そういう思いだと、純粋に今やることを楽しめないなと思います。大人から見て意味がないことを楽しめる、何にもならないように見えることに必死になる。それに理由はいらないと思います。 その楽しむ心こそ、子どもの未来を支える大きな力になるのだと私は思います。

ルールや規則にばかり気をとられ、常識の枠の中で苦しんでいるのが今の日本の子どもたちです。 常識の枠からはみ出して初めて、その子らしさが輝き始めます。

大人は、子どもたちに自分たちの常識を押し付けることを考え直さないといけないように思います。 これからの世の中は非常識の中にあると思います。 落合陽一をご存知ですか？ 現代の魔法使いと呼ばれて多くの発明をしています。彼のYou Tube をぜひご覧ください。教育についてもたくさん語っています。

さて、そこで手始めに鼻歌でも歌ってみましょう！！ ニコニコ笑顔で鼻歌を歌って、楽しそーにしているお父さんやお母さんから、子どもたちはきっと「世の中は楽しいところなんだろうな」「社会に出たら面白いことがいっぱいありそうだな」と親を通して感じる事でしょうね。 子どもが社会を学ぶのは親を通してです。親がどうやって社会と向き合ってるか？それを身近で肌で感じ取っているのが子どもたちです。(この場合の子どもとは、思春期くらいまでの子どもたちです) これからの世の中を楽しむのは、一人一人の心の中を楽しむことから始めることだと思います。



# ぶなの森通信

No.4

2018年7月

今回「ぶなの森通信」の最後は、私の自己紹介をさせていただこうと思います。

ドイツに来て、26年ですが、何を思ってドイツに来て、その後どんな人生をたどって「今の私」があるのか、お伝えしようと思います。このプロフィールは、金太郎あめのように、どこを折っても「わたし」です。

稲垣真理子

三重県桑名市生まれ ドイツ在住26年 幼児教育者

大学の保育科を卒業後、名古屋市の公立保育園に勤務するも、10年目を迎える頃には仕事に追われる日々が続く。心身ともに疲れ果てていた頃、ふと立ち寄った書店で、運命的に出会った1冊が「ミュンヘンの小学生」。シュタイナー教育について表した本であった。大学卒業後に一度読んだ本ではあったが、再度読み返してみると、以前とは全く違う感動を覚え、すぐにドイツでシュタイナー教育を学ぶことを決意。その後名古屋のシュタイナー教育の勉強会に通いながら渡独の準備を始め、2年後には、13年間務めた名古屋市立の保育園を退職し、フランクフルト空港に降り立っていた。

1993年シュタイナー幼稚園教師養成学校に入学、その後ケルン、ベルリンで3つのシュタイナー幼稚園で実習する中、ドイツ語で思うようにコミュニケーションが取れないことに苛立ちを感じながらも、言葉に頼らず、相手の内面の繊細な動きや感情の変化を感じ、受けとめようとする中で、人との響き合いが生まれることを身を持って体験した。

シュタイナー教師養成学校を卒業後すぐ日本人男性と結婚、3人の子どもの出産を経て、2007年デュッセルドルフに「子育てサポートぶなの森」をオープンする。時代の流れから、子どもらしさより、より早く自立するさせることを推奨する早期教育に疑問を持ち、子どもらしく安心して遊べる場所、お母さんやお父さんが笑顔で子どもと過ごせる場所をつくりたいという思いで場づくりを続けて、今年で11年目となる。「遊び」と「学び」の二つの柱をもつ「ぶなの森」は、託児、工作・親子教室、子育て相談・講演会、講師を招いての講座やコンサート、人形劇などのイベントを多数企画開催し、1000人以上の子どもたちが参加し、1997年から開催している日本クラブでの親子教室と合わせるとのべ、4000組以上の親子と接してきた。

2009年、スウェーデン人 ペア・アルブムが提唱した「直感教育」に出会う。

「遊び」を通して感じる心を育て、人とのコミュニケーションをより良くすることを目的とする「直感教育」の世界に触れたことによって、今まで自分が良き妻、良き母、良き教師として生きることを追い求め、出来ない自分を責めて、必死に戦っていたことに気づき、素の自分を受け入れ始める。そんな自分自身の経験をもとに、2015年からは、自分を知り、人を知り、コミュニケーションを学ぶ場として、ドイツと日本各地で体を使った遊びのワークショップをスタートさせる。

離婚を機に、夫の経営していた会社から独立して、2018年より「ぶなの森」の個人事業主となり、活動の幅を広げ始める。

現在、ドイツ語と日本語の二か国語での親子教室、イベント、託児所を今年秋と来年春開設目指して準備中。幼い頃から、異文化と異言語に触れることにより、人種を超えた相互理解と言語だけに頼らない、コミュニケーションを体験できる場をこれからも数多くつくっていきたく願っている。

東日本大震災後より、被災地、宮城県亘理郡山元町を支援。2015年より福島県、宮城県 5か所でコンサートを「ラインの風 Japan」のメンバーと開催。2016年7月「サウンド メディテーションコンサート in デュッセルドルフ」において ライアーで三味琴奏者 福島千種氏とコラボ演奏をする。

趣味で始めた、自然農法の畑では、常時30種類以上の野菜を仲間と共に育てている。ドイツ生活が長いですが、シンプルな日本食が大好き、手作り納豆とぬか漬けが自慢。シュタイナー教育から生まれたライアーを弾くのが大好きな、蟹座 O 型。

三児(22歳、20歳、18歳)の母